

多様なコミュニケーションの 機会をデザインする高校事例

実際に使うことなくして、コミュニケーションの力は磨かれませんか。
授業や特別活動の工夫、あるいは教師の関わり方を変えることで、
生徒が多様なコミュニケーションの力を発揮する機会を創り出している事例を紹介します。

CASE 1

地域と協働して「場数を踏む」機会を
多数設け、意欲と自信につなげる

なかじょう
中条高校（新潟・県立）

トークフォークダンスや 小中学校での読み聞かせを導入

新潟県胎内市内唯一の公立高校である中条高校には、多様な生徒が入学する。素直さの一方で、「コミュニケーションへの苦手意識や自信のなさ」がうかがえる生徒も少なくない。校長の横堀正晴先生は3年前の着任当初について、「生徒が学校を楽しんでいる様子があまり感じられなかった」と振り返る。そこから「イノベーション」を掲げ、「やれることは片っ端から取り組んできた」と言う。

イノベーションのポイントの一つは、生徒が多様な人と関わる機会を大幅に増やした点。その代表的な活動が、生徒と地域住民が短時間の対話を繰り返すトークフォークダンスだ。地域探究に向かう準備として、今年度から1・2年生を対象に始めた。当日は、生徒約80人に対し、幅広い年代の大人が84人集まった。ペアを替えながら、自己紹介、将来の目標、地域の課題や未来まで、お互いの考えを交換していく。会場には終始、笑顔と熱気があふれていた。「多くの生徒が、コミュニケーション能

力とはうまく話すことだと思ひ込み、『自分は苦手』と言います。しかし、そうではなく、相手の話を聞いて理解する力こそ重要です。お互いが理解し合うとすることでコミュニケーションが深まる。そのことを実感する機会になったのではないだろうか（教務主任・保坂和洋先生）

この成功を受け、手法を異学年交流にも応用。探究活動で学んだことをテーマに、1年生と3年生がトークフォークダンスを実施した。年度末には、同様に将来の目標や合格体験を話し合う予定だ。

「3年生には『思い切り、先輩面』して話していい」と伝えていきます。学年を横断する取組が少ないなか、自らの経験を誇る場にしてほしい」（保坂先生）

また、課外では、希望者を募り、近隣の小中学校での読み聞かせを始めた。読み聞かせには技術が要するため、事前指導を行い、何度も練習して臨む。

「最初は緊張で固くなっているけど、小学生や中学生に歓迎され、最後は感謝の言葉をもらい、達成感に満ちた笑顔で帰ってきます」（横堀先生）

このほか、探究活動や教科学習の延長で、県内および県外の高校との交流企画、外部コンテストへの参加など、新しい出会いや人前に出ていく機会を多数設定。結果、無口な生徒が学校代表として発表を行うなど、幅広い生徒に活躍の場が広がっている。

「人と関わるのが苦手な生徒たちも、場数を踏むなかで一歩ずつ前へ進んでいる。自信をつけ、場を楽しむようになってきました」（本間由紀先生）



トークフォークダンスでは生徒と大人がペアになり、ファシリテーターが出すテーマについて、1分程度の「話す」「聞く」を交互に行う。それを、相手を替え繰り返す。



写真左から教務主任・保坂和洋先生、本間由紀先生、中川千恵先生、校長・横堀正晴先生。

生徒インタビュー



左：本間 秀さん（3年生）、右：平田美里さん（3年生）

相手が大人でも自然体で話す

自分は人と話すことが好きで、地域の方とのプロジェクト活動にも楽しく取り組んできました。話すときは、相手が誰であっても、嫌な気持ちにさせないことと、自然体で接することを心掛けています。言いにくいことは言い方を工夫し、必要なら「すいません、無理です」とはっきり伝えるようにしています。卒業後は電気工事を行う会社への就職が決まっています。仕事ではお客さんとの会話が大事になるので、高校で培ったコミュニケーション力を活かして働いていきたいと思っています。（本間さん）

相手を理解しようと話を聞くことを大切に

私は元々、人と関わることに少し抵抗感があったのですが、高校で学校外のいろんな年齢の人と接する活動が増えて、それを楽しいと思うようになりました。特に印象に残っているのは、小学校での読み聞かせ活動です。子どもたちの反応に元気をもらい、もっと関わってきたいなと教育関係の仕事に興味が湧きました。コミュニケーションでは、相手を理解しようという姿勢で話に耳を傾けることが大切だと思います。子どもを表面的に判断するのではなく、それぞれの良さを理解しようとする、そんな小学校の先生になりたいです。（平田さん）

生徒の意思を引き出す探究でコミュニケーション力を発揮

もう一つのポイントは、探究活動のリニューアルだ。以前の探究プログラムは、地域と連携して地域課題の解決策を考える「Z型」だった。しかし、「生徒の意欲を喚起することはできず、やらされ探究になっていった」と保坂先生。

「生徒にとって楽しい探究にしたい」と、これまでの地域との関係性は活かしつつ、生徒のやりたいことから出発する



小学校での読み聞かせ。小学生の純粋な反応に「嬉しかった」「練習したいがあった」と生徒たち。

「W型」へ内容を一新した。

1学年でのインタビューやファシリテーションなどのスキル学習と、そのスキルを実際に地域に出て使ってみる活動を経て、2・3学年では生徒がやりたいと思ったことをテーマにする「マイプロジェクト」に取り組む。例えば、「おいしいシークリームを作りたい」と地域の洋菓子店に教えるを請い文化祭で提供したり、赤ちゃんを泣き止ませる楽器の音色に興味をもち保育園で実験を行ったり、さまざまなプロジェクトが誕生。学んだスキルを活かして、地域と対話しながら進めていく活動を、教員とメンター役の県内5大学の学生が支援する。

「生徒がやりたいということは否定しない方針です。もちろん実現困難なこともありますが、やりながら方法を探していけばいい」（横堀先生）

生徒は自身の想いや考えを教員に肯定されることで背中を押され、地域に

飛び出し、やりたいことの実現のために必要な他者とながり、関わっていく。

そのなかで大きく成長する生徒もいる。積極的に人前に出るタイプではなかったある生徒は、「文化祭を盛り上げた」と県内で活躍中のラッパーを招くプロジェクトに取り組んだ。同校後援会の総会でプレゼンテーションを行って費用を調達し、交渉・調整も行い企画を実現させた。

「実現までにはいくつも障害があったが、いろんな先生たちが陰日向となり応援した。本人は何度も諦めそうになりながら、それを乗り越え、最後までやり遂げることができた」（横堀先生）

生徒が自ら学校外に出ていき、多様な人の協力を得ながら成長する姿が、教員の意識も変えていく。

「生徒が自由に地域で活動することに、心配性の私としては、少し怖さもありました。しかし、思った以上に楽しそうに

力を発揮する様子に、「こんなことができるんだ」と気づかされます」（本間先生）

そのなかで、生徒たちは自分なりのコミュニケーション力を発揮している。企業から転職し、今年度から同校に勤務する中川千恵先生は、「上司の顔色を見て上手に話す人が有能な社会人だとは思わない。この学校の生徒の、時には嫌なことは嫌と意思表示できる素直さは、大きな強み。連携する側にとっては非常に対応しやすいのではないか」と話す。

横堀先生は、生徒の表情の明るさに3年間の成果を実感している。

「過去の蓄積の上に、地域からの応援と生徒自身の意欲がつながり、学校が元気になった。今後も取組のブラッシュアップを図っていきたい」（横堀先生）

実践のヒント

- 教員が生徒のやりたいことを否定せず、生徒のW型から始まる探究活動で、苦手なことにも挑戦しようとする動きづけを行う。
- コミュニケーションのスキル学習や、一対一のトークフオークダンスから始めるという、小さなステップを設定する。
- 地域の大人や大学生、小中学生、他校の高校生、校内の先輩・後輩など、年齢も立場も多様な人との接点をつくる。
- 地域探究、各種コンテストなどで、人と関わることや人前に出る場数を踏ませる。

学校データ

1910年創立／普通科総合選択制(探究教養コース・地域産業コース)／生徒数126人(男子82人・女子44人)／地域と連携した探究活動等により、第13回キャリア教育推進連携表彰(文部科学省・経済産業省)奨励賞を受賞。